東方稲子神

アポリオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方稲子神

【Ｎコード】
Ｎ８０３０Ｙ

【作者名】
アポリオン

【あらすじ】
どうもアポリオンです。メインの「とある死神の娯楽遊戯」が行き詰ったので、気晴らしにちまちま更新していきます。いわゆる東方の短編集です。

そうだ、牛乳を飲もう　その１（前書き）

内容には全く関係ありませんが、最近この二人が愛し合ってれば世界が少しは平和になるんじゃないかって気さえしています。

そうだ、牛乳を飲もう　その１

がりがりがりがりがりがりがり……

「ムラサ、ストップ」

縁側で足をぶらつかせながら噛むことおおよそ３０分。かじっていたら肉まで届きそうだった。
私はイライラすると爪を噛む癖がある。爪を切る必要がないくらいに噛む。
もう何年ちゃんと切ってないか分からない。おかげで先っぽはいつもガタガタ。でもそのうち自然と削れて丸っぽくなってくから困らない。
だけどイライラしてなくても無意識に噛む癖がある。だからホントにいつもガタガタ。

「これダメだって……私が切り揃えたげる」
「いや、別に困ってないからいいわよ」

ぐいと手を掴まれ引き寄せられる。顔近い、顔近い。

「だぁめ。私が許さない。女の子なんだから指先にも気ぃ使っとこうよ」
「そういうのとか、あんま興味ないし」
「だぁーめ。ムラサがよくても私がいくない。可愛くしたげるって」

余計なお世話だ。私は海に生きた女。そして今は聖と仏に仕える身だからそういうのはいらない。
私自身、もとから興味ない。男を誘惑するための飾り付けなんて私はいらないのだ。余分なことはしたくない。
まっすぐに、清く正しく、まじめに生きていけばいい。

「何でそんなことするのよ」
「ん？　好きだから」

いっつもそうだ。私にちょっかいかけてばかり。世話焼き。おせっかい。
何で？　って尋ねればいつも決まって「好きだから」。悪戯の免罪符みたいに言わないで欲しい。
仏頂面だったりニヤケ顔だったり。そんな軽々しく挨拶みたいに言う言葉じゃないんじゃない？　知らないけど。
何考えてんだか。まったくもって正体不明。いや意味不明。
私は好きって感情なんて分かんないからいつも困る。困惑して、戸惑って、面倒になって考えるのをやめる。

ヤツは可愛らしいピンクの小さな爪切りを持ってきた。ほら、手出してと催促されて反射的に手を差し出す。
エスコートでもするみたいに恭しく握られて手のひらにキスされる。髪の毛が当たってこそばゆい。

「私のこと、ちゃんと見てくれますように」
「今こうやって見てるじゃない…」
「それは違うよムラサぁ」

手首のあたりをざりざりと舐めてきたので叩いて躾けた。
まったく舌が動物なら行動まで動物なんだから。だったら叩いて躾

ないと。

「そういう悪戯はいいから。そんなんするなら私、席立つわよ？」
「いや、ダメダメ。そんな手してたら自分引っ掻いちゃうでしょ？」
「引っ掻かない！」
「腕のとこ、かさぶた作ってるのに？　ほぅら、大人しく切られちゃえばいいのよ！」

ぱちん、ぱちん。と白い半月が飛んでいく。噛み切れず残った部分が綺麗に丸く切り取られてく。
あれってどこに行っちゃうんだろうね。目で追ってても分かんない。見失う。あ、床に落ちた。これ踏むと足痛そう。
鼻歌まじりに手際よく切っていくコイツが恨めしい。しかも無駄に上手いから余計腹立つ。
鼻歌に合わせて羽が動くからそれを眺めて目玉をきょろきょろ。ぐるんと一回転。

何でこんなヤツに好きに爪切らしてんだろう。この手をぴっと引っ張って逃げたらいいじゃない。
いや、違うよ。逃げる必要なんてない、ただ帰るだけでしょ。自分の部屋戻って後片付けの続きとか。
台所でおゆはんの支度とか、庭先の洗濯物取り込んだりとか。やることはいっくらでもあるんだし。私だってヒマじゃないし。
離して、離してよ、離せよ、この……

「ぬえ！！」
「ん？」
「……早くして、じゃないとまた噛んじゃう」
「ん、了解であります船長！」

こういうときだけ調子乗らないで欲しい。なーに笑ってんだか。
爪の断面をやすりでしゃこしゃこ削られる。白い粉がいっぱい飛ぶ。
いけないお薬みたい。
指の腹でいっこずつ触って削れたか確認してる。早くしてよ。イライラするんだから。
足の指を閉じたり開いたりしたり、擦り合わせたりして居心地の悪さを紛らわす。
上を向いて、天井の木目を数えてやりすごす。私は何にイライラしてるんだろう？
たぶん私にしてる。というか何でか分からないことに分かんなくて、分かんないからイライラしてる。
……自分の分かんない考察が一番分かんない。

聖とかの前ならこんなことならないのに。じゃあコイツのせいね。
決めた。私なんかの相手してるヒマ妖怪にイライラしてる。

「ムラサの爪って綺麗…ほら、まっすぐにピンと伸びてて歪みがない。表面も削ったらこんなにピカピカになったよ！」
「うぇ？」
「いいなー惚れ惚れしちゃう。じゃあ反対もね。これ終わったらマニキュア塗ろうねー」
「い、いやだっ！」

そんなの……かじれなくなっちゃう……！

「ふふん♪」

コイツの真っ黒いマニキュアを塗った指が私を掴んで離さない。
じったばったと暴れても余裕の表情でぱっちん、ぱっちん。妖怪ってこんなに力強いんだ。

にひひと笑う口から覗く牙を何とかへし折ってやりたいと思って、作戦を練ろうと思って、大人しくした方が得だと思って、だから静かにした。
私の爪がなくなっていくんだからコイツの牙もなくなってもいいはず。また生えてくるんだし、いいでしょう？
表面を目の細かいやすりを使い、至極楽しそうに削っている。粉を払うためにふーーって息を吹いて最後に手で払われた。
表面を触っては満足そうに笑ってる。真っ黒いマニキュアと、真っ黒い服、真っ黒い髪。いやだ。

「……黒はいやだからね」
「そんなに私のこと嫌い？」
「……。」
「じゃあ、好き？」
「まさか！」

私に分かるはずがない感情を、よりによってコイツになんて。

「じゃあさ、これ塗ろう。透明でラメ入りで可愛いよ。あんまり派手じゃないしこれならムラサもそんなに抵抗なくできるんじゃないかな」

だって塗るの初めてでしょう。ってクスクス笑ってる。馬鹿にされた。きらきら光る小瓶を揺すって、羽が楽しげに躍っている。
分かった、やっぱり嫌いだ！　だってこんなにもイライラする。嫌いよ！　似合うなんてお世辞言っても騙されないからね。

「黒なんて、嫌いだぁ……！」

マニキュアは、つんとアルコールの臭いがする。あんまりお酒好きじゃないからこの臭いも好きじゃない。
いや、あのお酒は好きなんだけどあんまり強くないから、つまりまぁお酒は好きじゃない。とも言える。かもしれない。という負け惜しみ。

「サクッと塗ってよね。貴重な時間なんだから」
「私たちにとって時間なんてあるようで無いものでしょう？」
「違うわよ、ちゃんと人としての感覚は忘れちゃダメだって聖言ってるじゃない。私含めてアンタ以外、みんな規則正しく生活してるわ」
「私は好きなことしかしたくないから、みんなと時間合わせてないんですー。あと夜行性なので」

そんなの言い訳にしていいわけない。
夜行性っていうなら星やナズだって本来そうだろうに。一輪だって雲山だって妖怪なんだからほんとは夜が得意なんだ。
それを何十年、何百年という歳月をかけて修正してきた。コイツにだってできるはず。
なのに自らの意志で不規則な生活をしてるなら論外。もう勝手にしてくれ。
聖が優しいのは知ってるし良いことだけど、何でこんなへんちくりんを一緒に住まわしてるんだろう。
こんなのだったらよくその辺をふらふらしてる傘の子の方がいいんじゃないの？

「アンタなんでこの寺いんのよ」
「だから、ムラサが好きだから」

これしか言えないの？　悪戯がバレたときの言い訳ってたくさん考

えないのかしら。
ぐるんぐるん脳みそが混乱してる。コイツと喋ると疲れる。そうしてる間にもせっせかマニキュアが塗られていく。
私の爪が今までにないくらいに、キラキラって輝いていた。あかぎれ、まめ、切り傷、擦り傷なんかが常だった手に似つかわしくない爪。
さっきまで噛んでたなんて信じられないくらいにキラキラでピカピカだった。

……なんだかちょっぴり、こういうのも悪くないかもね。

「ささくれもいっぱいだね……これ自分で剥いてるでしょ？」
「だって噛むと皮膚はがれるし。それ邪魔だし。イライラするし」
「もっと自分大切にしなよ」
「どうせ死なないからいいのよ」

もう死んでるし。幽霊だし。なのに妖怪だし。というか爪とかささくれくらいで如何にもなんないし。
腕ぶっちぎれても時間経ったら治るんだから。私たちはそういう存在でしょう？

「私が嫌だから。やめて」
「なにそれ……勝手すぎる」
「はいはーい、何とでも言って下さいな。塗れたから１０分くらい動かさないでね」

ぼふっと私の胸に飛び込んで言った。
最後の方はもごもご言っててあんまり聞き取れなかった。え？　なにしてるの？

「柔らかい。あったかい。ぽふぽふ、ぽふぽふ」
「ねぇ……今度、風呂入るときは気をつけなさい。知ってるかしら。生物はたった洗面器1杯の水だけでも溺れることができるのよ？」
「それは怖いね」

そのあとも爪が乾くまでの約１０分。コイツは私にしがみついていた。だから最後に一発叩いておいた。
躾はちゃんとしないと。というか、ほんとに沈めてやろうかしら。

そのあと台所におゆはんを作りに行った。
先に一輪がいたから申し訳ないなって思いながら手伝ったけど、何だかいつもと違ってやりにくかった。
変わっていないといえば変わってないけど、気になって仕方ない。
手をわきわきと動かして、意味もないのに陽に透かしてみた。ガタガタの部分はきれいさっぱり無くなっていて、かわりにピカピカの指先があった。
爪が短くなって困ることがある。袋を開けるのがやりにくい。気になってしょうがない。
なによりもかじれない。一度かじってみたが妙に苦くてやめてしまった。
でも。写経をするとき、筆を握っても痛くない。皮膚をぽりぽり掻いても血が出ない。頭洗うのが下手な私は爪を地肌に立てて洗うが今日は？

「痛くない……」

イライラしたから、これからはアイツのおゆはんには嫌いな野菜をたっぷり入れてやることにする。ざまみろ。

そうだ、牛乳を飲もう　その１（後書き）

最初はメインでも活躍中のぬえとそのカップリング相手のムラサのおはなし。

そうだ、牛乳を飲もう　その2

命蓮寺の朝は早い。
日の出と共に起床。冷たい水で顔を洗って、湯を沸かして。朝のお勤めの準備。あくびを噛み殺して今日もがんばる。
ほうら、こうしてる間に本堂にみんなが集まってくる。ぴっしり衣服を整えた聖とそれにぴったりくっつくみたいにして来る一輪。
髪が跳ねている星は尻尾を隠し忘れていて歩くたんびにゆらゆら揺れて、ご主人の髪を直そうと甲斐甲斐しくぴょこぴょこ飛ぶナズーリンに当たりまくっていた。
あぁ、もちろんアイツはいない。どうせ今頃お腹出して寝てるに違いない。

「みなさん、おはようございます。今日も新しい日を迎えることができました。感謝しましょう。そしてまた一日、安らかに過ごすことができますように」

――――はいっ！！

朝の澄んだ空気に凛と響く聖の声で、挨拶で、今日も一日がはじまるのだ。

大体2時間くらいのお勤めを終えてやっと朝食にありつく。
酸っぱいもずくがおいしかった。疲れがとれる。よく浸かってるたくあんでご飯3杯は余裕。
つやつや白飯って噛めば噛むほど甘くなってお腹もいっぱいになる。
だから口を閉じてしっかり咀嚼。1、2、3……ごっくん。

シャケの塩加減がいいあんばい。小骨はペッてした。でも皮は食べる。身と皮の間に、絶妙なうまみが詰まってる。
お味噌汁のわかめと豆腐があっさりで、味噌のコクがたまらない。あったかくてお腹に優しい。ぬくたまる。
黄色のふわふわ卵焼きが最高。今日はだし巻き卵だったから、明日は甘い卵焼きだ。明日も楽しみ。

早起きでお勤めして、今日もメシがうまい。ごちそうさまでした。幸せ補充、完了。

「ねぇー。一輪てさ、何で聖好きなの？」
「急にどうしたのよ？」

かちゃかちゃと食器をぶつけながら二人でお片付け。
他のみんなは次の行程に進んでる。私はこれが終わったらアイツを起こすだけの簡単なお仕事。
アイツもみんなと一緒にご飯食べたらいいのに。温め直したらあんまりおいしくないのにね。
一人分だけ残った食器とおかずにちょいと寂寥感。と同時に片付けが進まないということに物憂い。

「その好きは、どんな『すき』なの？」
「お付き合いしたい方向での好き、かしら」

答える間も手を休めることなくせっせかお片付け。洗い上げた皿の水気を切って拭いていく。
流しも綺麗に洗って、でた生ゴミを袋に入れてぎゅっとしばる。……やっぱり、爪が気になってしょうがない。

「付き合ってなにするの？　今もほとんど一緒にいるのに」

「一緒にいたいし、手繋ぎたいし、キスもハグも、あわよくばそれ以上も……」
「契るの？」

ザーッと流れる水音が気になったけど蛇口が一輪の奥にあったから、能力を使って流れを止めた。
一応、頑張れば水を操ることもできる。うん、こうすれば一輪の声がよく聞こえる。

「そう、ね……肉には逆らえないから」
「戒律は？　経典には禁欲って書いてあるわ」
「姐さんは中道を推してる。快楽も禁欲もほどほどに、真ん中を、ってね。言い方は悪いけどその方がいずれは檀家が増えるわ」
「女同士だなんて非生産的……」
「それがどうも、この世界じゃ必ずしも非生産的じゃないみたいで。はははは！　不思議な世界よねぇ」

珍しく大口を開けて笑う彼女に、呆気にとられる。ぽかんと間抜け面だったのだろうか。おでこを突かれてしまった。
たしかに、恋仲だと言われている少女達をたくさん目にする。寄り添って、幸せそうな姿をよく見る。
それらを私には関係のないことだと思って、見ていた。

「心があるから。愛してるって思うから、私は姐さんが好きでたまらないのよ。今でも十分だけど」
「一輪てば妖怪なのに人間みたい」
「ムラサもいずれ分かるわ」

くすくす笑う一輪には、馬鹿にされたって思わなかった。どうしてだか、アイツにだけはいつもイライラする。疲れちゃう。

とにかく分かったことは、人間も妖怪も案外違わないのかもしれない、ということ。
どっちも複雑で面倒な感情を持った生き物なのね。

『あなたにこの船を与えましょう。あなたは私のために働くのです』
誰かに必要とされるのは何て嬉しいことなんだろう。自分の怨みひとつで現世に留まって、恐れられ、妖怪となった私には縁がなかった。
恋も愛も知る前に死んでしまった。それを聖に救われて。この人についていこうと思った。私の希望だった。
こんな私を赦して必要としてくれた。だから恩義に報いるために今日も今日とて、

「ぬえー、いい加減に起きなさい。ご飯冷めちゃうわよ！　もう冷めてるけど！」

コイツの布団をひっぺがすのです。

「あー……おはよ、ムラサぁ」
「さっさと起きる。私はアンタの母親じゃないのよ」
「キスしてくれたら起きる」
「意味分かんない。訳分かんない」

起こそうと引っ張ったら、逆にコイツに引っ張れて布団に突っ伏してしまった。
獣臭い布団。ぎゅっとしがみつかれて、羽も使って拘束された。私

のイライラは一気に募り、さっきまでの幸せがチャラになる。

「ムラサぁ、好きだよー」
「聞き飽きたわ。つまんない」
「本当だってば。キスして、ね、ね」
「キスは『すき』な人としかしません。ほら起きる、馬鹿ぬえ！」

文字通り、叩き起こす。これがお遊び終了の合図で、それ以降はちゃんと起きる。
毎朝このやりとりをするのは少し疲れるけど、仕事として捉えるならばかなり簡単な部類。
あとは朝食を整えてやって、その間に掃除と洗濯。食べた頃合を見計らって後片付けをしてから昼食の準備にとりかかる。
だいだい毎日同じパターン。今日はおうどん湯がいて釜玉にしよう。つるつるっと喉を通る湯で加減にすればいい。
薬味はしょうが、みょうが、ねぎを刻んでおこう。付け合わせはさっぱり身とチーズを海苔でくるんで揚げればいいかな。ナズが喜ぶに違いない。

「私行くわよ」
「待ってムラサ、すぐ着替えるから」

コイツはいつも、やけに私と一緒に行動したがる。普段はふらふらと遊びまわってるのに私を見つけるとべったりくっついて離れたがらない。
まるで聖と一輪みたい。泣きじゃくる子供みたいで鬱陶しいというのが本音だったり。だけど、それが嫌じゃなかったり。

……あれ？　まさかね。

「明日は早く起きようかなぁ……」

後片付けに訪れた食卓にて、ぽつりつぶやくアイツが麦茶を注ぎながら話しかけてくる。

「どうして？」

「だって明日は甘い卵焼きでしょ？」

「そう、ね……アンタもたまにはみんなと一緒に食べたらいいわ。片付け2回しなくて済むし」

一人で食べるご飯なんて美味しくないだろうに。頬についた米粒をとってやりながらそんなことを考える。

大人しくしてれば可愛いのにね。ぎゅむぎゅむと頭を揉んでみた。

「……ムラサ？　何してるの？　痛い～」

「あー、カタチのいい頭だなぁと」

「どうせなら頭撫でて欲しいなーって思ってみたり」

「いやよ」

「んーじゃあ爪塗って欲しい」

「マニキュア落としたの？」

「だって黒いの嫌って言ってたからさ」

にひひと笑う口の、真っ白い牙が今日は可愛く思えた。

「これ終わったら庭の手入れ手伝いなさいよね」

「分かったって」

二人向き合って、猫背になりながらマニキュア塗り。爪が見えやすいように顔を近づける。

私より小さな手に、長く整えられた爪が並んでて何だか嫉妬。

でも伸びる前に噛んじゃう私には無理だからという無いのもねだりであって、これは決してコイツが羨ましいとかじゃないのだ。

「ハケを縦に動かしてね。一方向しかダメだよ」

渡された目に毒々しく、鮮やかすぎる色の小瓶が、魔女から差し出された毒瓶みたいってメルヘンな思考に陥ってぐるんぐるん。

これの蓋を開けたらどうにかなっちゃうんじゃなかろうか。イライラ爆発とか？

ハケに液を含ませて、爪に乗せる。そのまま縦に動かせばスッときれいに伸びる。塗ってくたんびに、真紅に色づく。

唇、舌、コイツの瞳。全部が赤。目に悪い、心に悪い。頭の中にいつまでも残ってふとした時にコイツの笑顔ごと鮮明に思い出しそう。

「ムラサはさ、私の気持ち、受け取ってくれないの？」

「……なにが」

「好きなんだってば」

「意味分かんない」

「それは『好き』って意味が？　私がムラサのこと好きってことが？」

ハケを動かして赤を重ねる。二回塗った方が発色がいいって教えられたから。

「本気だよ、私」

「……動かないで。塗るの初めてではみ出ちゃいそうだから」
「何が不満なの、性別？種族？それとも戒律？　はぐらかさないで、いっぺんちゃんと考えてよぉ…」
「……一方的な感情を押し付けないで。理解の範疇を超えるわ。あと聞き飽きた」
「私にはムラサが必要なの！」

必要とされるのは嬉しいこと。喜ばしいこと。存在証明と存在意義があるっていうのはとってもステキ。
コイツなら好きの意味、ちゃんと教えてくれるのかしら。ピンからキリまで、いろはにほへと、私が知らない感情を。

「迷惑かな……ムラサ？」

あぁ———こういう、しおらしい顔もできるのね。面構えは嫌いじゃない。むしろ好きな部類だったりする。
つややかに濡れた唇なんて、すんごく魅力的。私にだけしか紡がれない言葉が嬉しい反面、とってもうるさい。塞いでみたいと、思ったりね。

「迷惑って言ったら、それは嘘になるわね。はい。両手塗れました。動かないように」
「ムラサはずるいよぉ……どうせ私置いてきぼりにして、庭の手入れいっちゃうんでしょ？」

泣きそうな顔で見つめられて、立ち上がりかけた足を元に戻して腰を落ち着ける。草むしりの真っ盛りにはまだ程遠い。
木の枝だってそんなには伸びてない。ちょっとくらい休憩してても誰も怒りゃしないだろう。
それに、たぶん、コイツを置いて一人で行く方がきっとイライラす

る。

「んー…ぎゅむっ」
「ちょっと…何してるの？」
「分かんない。ぬえのぺちゃんお胸、ぱすぱす」

そのあとマニキュアが乾くまでずっと抱き着いていた。柔らかい、あったかい。前回の仕返しをするには丁度いい。
そうね、私はコイツのこと、好きだったりしてね。

まさかね。だけどそのまさかがあり得えちゃったり、ね。

そうだ、牛乳を飲もう　その3

朝はすんごく早いけど、実は夜寝る時間はそんなには早くなかったりする。かといって夜更かしもしない。
その日のうちに就寝、というのが暗黙のルールだったりする。まぁ、お酒飲むときは破っちゃうんだけど。
私は一人で黙々と就寝前の写経に勤しむ。文字を書くという単純作業と墨のにおいが上手い具合に眠気を誘ってスッと寝付けるから。だから仏様には悪いけど心身をすっきりさせてるわけでもないし、内容もあんまり頭に入らない。聖、ごめんね？
しばらくすると障子の向こうから遠慮がちな声が聞こえて、

「ムラサいる？」
「あとちょっと……」
「写経？」
「うん———よし。入っていいわよ」

枕を抱えたヒマ妖怪がやってきた。

「ムラサぁー…」
「これはこれは夜遅いおでまして」
「えっと……一緒に寝ていい？」
「なんでよ」
「一輪の甘い卵焼き出来立てで食べたいから明日は早起きしたい。でも寝付けなくて…」
「何度も言うけど、私はアンタの母親じゃないのよ？」
「知ってるよ……」
「自分の部屋もらってるでしょうが」
「でもぉ……！」

「……。」

小さい子をいじめているような気分になったから諦めた。うつむいて、枕を握り締めている。頭のアホ毛はぺしゃんこだった。

「しょうがない。せめて布団も持ってきなさい」

「うぇー…だって部屋一番遠いじゃん」

「それくらい何とかしなさいよ。私もう寝るからね」

「やだやだ、だったら一緒の布団で寝ればいいでしょ！　まだ夜中ちょっと寒いし！」

文机をどけて一組の布団を敷く。毛布はこの前、押し入れの奥底に突っ込んでしまった。

たしかに最近また寒さがぶり返してきて夜中に布団を引っ張り上げる、というのも少なくない。

昼間の、抱き着いたコイツのあったかさを思い出して心がぐらぐら揺れる。

天然のカイロは嬉しいけど、でもこれってどうなの自分。下手したら夜這いじゃないんだろうか？

「ムラサぁ…ぐすん」

……うん。コイツにそんな度胸があるとは到底思えない。

妖怪としてどれだけ生きてるか知らないけど、生活の節々から鑑みて、どう考えても私より子供だもの。

「おいで。特別に入れたげる。この貸しは高くつくわよ」

「やったー！」

一組の布団に枕が二つ。みょうちくりんな夜になる予感。
反対向いて寝よう。こら、あんまりひっつくなってば！

「寒い…」

風が吹いて戸が揺れる。ガタガタいう音が怖くてコイツの方を向いたら、口開けて寝てた。
コイツ……寝付けないとか言ってたくせに私より先に寝やがった。
ぐっすり幸せそうに寝息を立てて、無防備な姿晒しちゃって。
おまけにヨダレまで。気が抜けた。なによ、なによ。いっそのこと私の恐怖心を返して！

この際だからじろっと観察してみようかしら。

前髪が顔にかかってて寝顔がよく見えない。
だからかき上げて顔を覗き込む。閉じられた目があった。
伏せられた長いまつげが僅かに震えている。
シミ一つない白い肌によく映える。私も地底がだいぶ長いから白いけどね。
まぶたの下にあるだろう赤い瞳をイメージする。
コイツが私だけを見て私にだけ呼びかけて……うん、悪くない。

口元に手を当てて呼吸を確かめ、完全に寝ているか確認した。呼吸の乱れはない。完全に眠っていた。
起きていれば自分勝手いい加減なことばかり言う口が、黙っていれば憎たらしいほど可愛く見える。
くっつきたいって、触れたいって、思った。だからね。

キスしてやった。
ほっぺたに。

赤い唇、赤い舌。
赤い瞳に赤い爪。

それと一緒に鮮烈な笑顔を思い出す。あれは、馬鹿にしてたんじゃなくて、このマニキュアが私に似合うっていう本心からの笑みだったんじゃあ。
『私のこと見て』って言ってた。私はコイツをきちんと見たことがあっただろうか。
コイツの言うことを頭ごなしに否定して、聞かなかったことにしていなかっただろうか。
好きって何度も言ってくれた。たぶん、本心から。だけど私はひとの言葉を信じるのが怖いから。嘘をつくのは、いつも口。

「アンタは、嘘つかない？」

寒くて寒くてしょうがなくて、布団に潜り込んで、さらにコイツの腕の中に潜り込んだ。あったかくて安心して。
ぶるりと身震いひとつして、私は目を瞑った。

翌朝、私は寝坊した。

「一輪、何で起こしてくれなかったの！？」
「だってぬえと抱き合って気持ちよさそうに眠ってたから、起こしちゃ悪いと思って」
「卵焼き……！」
「そっち…？　まぁ心配しないでも二人だけに新しく作ってあげるから」
「みんなにも謝んなきゃ……」
「そのことなんだけど。姐さんが今日は休んでていいって言ってたわよ」
「え……？」
「毎日一番に朝のお勤めの準備してくれてるのがムラサだったから、そろそろ交替しましょうって。で、今日はボーナスのお休み」

最後に寝坊したのっていつだっけ。こんなにぐっすり眠ったのは久しぶり。不本意だけどアイツの腕の中は心地よかった。
意識が浮上しかけてもまだまだココにいたいと思ってすがるように、むぎゅっとひっついて深呼吸して再び眠ってしまった。
あぁ恥ずかしい。体温や鼓動なんかが気持ちよくって私を二度寝へとたぶらかした。あったかぽかぽかだった。さすが動物、平熱が高いのね。

らしくないことが続いているように思う。でも、私らしさってなんだっけ。まっすぐに、清く正しく、真面目に。
図々しいし悪戯っ子だけど、嘘はついてないはず。なによりも、あの暖かさは信じてみたかった。
忘れられそうになかった……悔しいけど。

二人っきりで、ちょっと遅めの朝食。
いつもよりかは随分と早く起きたコイツは、一輪が作り直してくれ

た甘い卵焼きをつっつきながら大あくびをしている。
牙が見えて、さらにピンクのベロまで見えた。嘘つきは閻魔様に引っこ抜かれてしまうというのは本当なのかしら。

「ぬえ！……私のこと、ほんとに好きなの？」
「あと何万回言ったら信じてくれるの？　もうずっと言ってるじゃん」

コイツは私に、「好き」と言い続けてる。それは終始一貫していて歪みない。
そろそろ私もこの子を信じてあげる時期なのかも。もしも嘘なら、私が引っこ抜いてあげればいいんだし。

「これから生活改善してくなら、考えて、あげる……」
「！？」
「悪いけど、言葉は信じられない」
「ムラサ、私、頑張るよ……！」
「私も、がんばってみるから」
「？」

それから何故か毎晩一緒に寝るようになった。
最初はすんごく嫌だったのだけど、コイツは夜に眠るようになり、その結果朝も起きられるようになった。
朝食をちゃんとみんなで食べられるようになった。コイツも嬉しそうだったし、聖が喜んでいたのが嬉しかったな。
昼夜逆転の、妖怪そのものの生活リズムが整ってくる。おまけに寺の手伝いをするようになった。
なんだ、やればできるじゃん。正直助かる。
私はアイツの爪みたいに出来ないのが口惜しいから頑張って伸ばし

始めた。
噛みたい衝動はアイツと接していない時に強く起こるようになった……おかしいな。
だからイライラしないように、気休めかもしれないけど牛乳をたくさん飲んだ。
そしたらだんだん改善されていってイライラすることも、爪を噛むことも少しずつ減っていった。
おまけに背が伸びてアイツとの身長差は開いたし、胸も大きくなったような気がする。ちょっぴりだけど。どっちも、とっても優越感。

「好き」という言葉を何度も聞いた。繰り返し、繰り返し、耳に残るくらいに。
「ほんとに好きなら自分で自分の腕、噛み千切ってみせてよ」とけしかけたら本当にしそうになったので慌てて止めた。
一騒動終わってから、私はとてつもなく後悔した。操縦はしてもいい。曲がりなりにも船長だから。
でも。弄んだらダメだ。ヤツは真剣なんだ。こんな私なんかに……馬鹿な子。

きっと、根はまじめでいい奴なのよね。悪戯といっても人に危害を加えるわけでもなし。本当に嫌がることをするわけでもなし。
まったくもって聞き分けがないわけでもなし。うまく操縦してやればいいのだ。なんだ、簡単なことじゃないか。
ちょっかい、世話焼き、おせっかい。全部全部、私のためにしていたんじゃないのかしら。分かりにくいよ、馬鹿。

そうだ、牛乳を飲もう　その４

まどろんで、世界が反転した。
深い眠りの淵で何かに呼ばれた。

紺碧の水面に投げ出され真っ逆さまに落ちていく。遠くなる光をぼんやりと感じて弱々しく手を伸ばした。
水流が大きな渦を描いて飲み込まれる。引き摺り込まれる。もう泳げないよ、体が重い。
苦しい、苦しい、いやだ、死にたくない、まだ死にたくない……。
口を開けば器官に水が入り、どんどん重くなっていく。呼吸が止まる。
やりたいことといっぱいあるのに、苦しいよ、いやだよ、どうして私がこんな目に、誰か、誰でもいいから助けて……！！

「ムラサっ！！」

かはっと一つ呼吸をして、私は目を開いた。見慣れた部屋とおかしな顔のコイツがいた。なんで、そんな顔してんのよ。

「あ、はははははは！！！！」

笑いが止まらない。変な顔。整わない呼吸で無理やり息を吸って一気に吐き出す。
大きな空気のかたまりを吐き出したら肺がぺしゃんこになって、もう声も出なくなった。
酸素が足りなくて肩で息をしたら、なにかが喉に詰まったみたいになって動けなくなってしまった。

「はは、はっ、は……」
「無理しないでいいよ」

目元を掬われた。濡れていた。ひゅうひゅうと息を吸って考える。そっか、私、夢を見てたんだ。怖い夢を見た。自分が死ぬ夢。いつまでも終わらない悪夢が延々とループする。いつもなら息絶える間際に聖が出てきて救ってくれるのに、この日は来なかった。

「無理しないくて、いいからね。私が一緒にいるから、さ……」
「ん……」

伸ばされた手は、大きくはないけど優しくて、あったかかった。すっとまぶたを押えられて目をつぶる。
恐ろしい心象がフラッシュバックしやしないかと恐ろしくてたまらないから手を掴んで、握った。握り返され、脈拍を感じた。どくん、どくん、と。
それに反応するように自分の手のひらも脈打ち、このあったかい手をきゅっと握った。すぐそばに、コイツがいた。

本当は寂しい、のかもね。怖い、んだと思う。あったかい、優しいのが欲しいの。
必要とされたい。離さないで。

泣きじゃくる子供は私の方だった。

何かが壊れて溢れて、吹っ切れて、そんな自分に呆れた。当の昔に

分かりきったことを、目隠しでもしていたのかしら。馬鹿な私。
ボケボケしてらんない。書物で勉強してみた。分厚い本をめくる。
ぺらり、ぱらり。ひたすらめくる。何が書いてあるのか分からない。
そもそも読めない。ただ、どうやら外の世界の言語は統一されてい
ないようだ。
きっとこうやって国々独自の言葉に変えてゆく過程で言葉の輪郭が
薄れていって本当に大切なことを忘れていってしまうんだと思う。
言葉は飾りだから。騙れてしまうから。だから、もっと、ずどんと
心に響く、簡単なやつがいい。

「あ……これ、いいかも」

そうだ、牛乳を飲もう　その5

お風呂から上がって熱いから服をだらしなく着て。濡れた足でぺったぺった歩く。
一輪に見られたら絶対に怒られちゃうような恰好。

「ぬえー、お風呂上がったわよ」
「ん、分かった、ありがと。これ終わったら寝る」

生活改善を始めてからだいだい半年。ついにコイツも写経をするようになった。もしかしたら私より真面目にやってるかもしれない。
元は猫背なのを我慢して、背筋をしゃんと伸ばして正座をして。後姿もなかなか様になっている。
終わるまで大人しくぺたんって隣に座る。さらさらって筆が紙を滑る音がして私は眠くなってくる。

「ぬえー終わった？」
「うん、終わった」

ぐしぐし頭を撫でられて目がトロンとしてくる。
そのまま耳の後ろを掻かれて眠くなったから背中にもたれて子どもがおぶさるみたいな形になる。

「羽じゃま」
「はいはい、仕舞うって」
「よろしい」

肩にあごを乗せて擦り寄る。いつからだろう。私がコイツに甘えるようになったのは。そもそも、イライラしていたのは何でだったっ

け。
好きって言うくせに方々を遊び回って誠意を感じなかった。特定のひとに必要とされたことがなくって、女の子として見てくれたのがはじめてで。
恥ずかしさと嬉しさがごっちゃまぜになってイライラしてた。朝は私の方が起きられなくなって、逆に起こされるようになった。
毎日毎日、コイツの腕の中が心地よくって、朝の当番が変わったことも相まって起きるのが億劫になって。
いつの間にやらコイツの腕の中が私の居場所みたいになって。世界中の誰よりも、一緒にいたいと願う相手。
それが紛れもないコイツ……ぬえになってたなんて。

……今なら言えるかな。
ううん、言ってもいいかな。

近付いた首筋から風呂上がりの石鹸とぬえの匂いが混じったのが、鼻腔に広がって落ち着くんだけど落ち着かない。
ずっとこうしてたいけど、動き出したい。まずは手始めに背中を離れ、隣に腰かけた。
最近蒸し暑くなってきたが、夜はまだ涼しい。ひっついても苦ではない。
大きくて、飲み込まれそうで。月明かりは燦々と降り注ぐ。青白い月。黄金色の月。月はいつだって美しく空にたたずんでいる。
さぁて、今日の月は？
「……ぬえ、あれ、見て」

おもむろに指さし、注視させる。闇夜に輝く美しい満月だった。
暗い空から、まぶしい真ん丸お月様が私たちを見つめていた。

「あー満月かぁ。いいね、やっぱり妖怪としては一番好きな月〜♪」
「……月が、きれい、ですね」
「そうねぇ。うん、きれいきれい。ほら、早く寝よっか。じゃないと悪戯しちゃうわよ？」
「しても、いいよ」

ぴゅうと風が吹く。経紙が翻った。目を閉じて、もいちど開くと、口を開けて牙むきだしで威嚇するぬえがいた。

「何言ってるか分かってんの？」
「アンタこそ、さっきのことば、意味分かってんの？」

ぬえの目のなかに月が映ってる……きれい。でも妬けちゃうな。
真っ赤な目は見開かれている。やがて解を見つけたのか窄められ、焦点が定まった。私を捉える。
今は月も映さずに、その瞳のなかには私だけ。

「『わたし、しんでも、いいわ』……？」
「うん、正解！　すんごく嬉しいけど、でも、死なないで欲しいな。だって好きな人に死なれたら私、困っちゃうもの」

あーあ。言っちゃった。答えはとうの昔から決まっていたけれど。
どうしてだか、素直になれなかった。ごめんね、ぬえ。
小刻みに体を震わせ、唇は戦慄いている。ずばっと羽が広がって奇妙に蠢いていた。揺れる声が聞こえた。今は、ちゃんと届く。

「やっと通じた……！！」
「今まで待たせて、ごめん」
「ううん、いいの、いいよムラサ、ありがと、ありがとう……！」
ぎゅうっと抱きつかれてあったかい。嬉しい。心がイライラとは懸け離れて、凪いでいるのが分かった。

「好き、好き、大好き、愛してるよムラサぁ！」
「初めて好き、以上の言葉が聞けた」
「言うタイミング逃しまくってて……ね、ね、キスして」
「その前に齧っていい？」

答えを聞く前に手を出した。
肩を引き寄せてこちらを向かせ、固定するために力を入れる。肩に爪痕が残る。
私は爪が伸びた。けどそのたびにぬえが綺麗に手入れしてくれるから尖ってはない。
皮膚に食い込んで、赤い半月がたくさん残る。爪の表面が、キラキラのラメがお星さまみたいに光る。
マニキュアが保護材の役割を果たすのか割れることがない。爪を噛むのをやめたら、ささくれもほとんどなくなった。
私の手は思ったよりつるんとした小綺麗な手だった。

噛みついた。かぶって噛みついて、ぢゅーっと音を立てて吸う。歯型も赤いあともいっぱいついた。
やったあとで痛いかな、って思ってぺろりと舐めたらくすぐったいのか笑ってた。
恥ずかしくなって、注意を逸らそうと思って、やってもらったみたいに頭を撫でて耳の後ろを掻いてやる。
喉をゴロゴロ鳴らしていた。にゃんこみたい。

「気持ちい？」
「ムラサの手おっきくて気持ちいい…」
「可愛げのない手で悪かったわね」
「そんなことない。一番好きな手だよ！　悪いことを言う口はこうしてやる！」

顎を確保され、口の中に指を入れられて、歯列と歯茎をなぞられる。喉奥につっこまれて、おえってしそうになった。畳を叩いて意思表示をするとぴたりと動きが止まる。

「ケホっ…あんまり奥は、いや」
「ご、ごめ…！」

私も悪戯がしたくなってぬえの手首をつかんで動きを止める。ちろちろと指先を舐めてみた。
指先だけがほんのりと冷たい。末端冷え性なのかしら？　私の咥内であったためたげる。
ねっとり舐めながら足を摺り寄せて体を密着させる。心なしか暑くなってきていた。だけどひっつきたいから、くっつく。

「ねぇ、ぬえさ初めて……、なワケないか」
「あー…」
「だって少なくとも私の数倍は生きてるんでしょ？」
「あの、その……」
「どうしたのよ」
「あのね、えっとね、笑わないでね？」
「うん」
「一人でしか、したことない。で、す……」
「へー…」

たっぷり１０数える時間はあったと思う。嘘は言わないはずだから、きっと本当。

「…そうなんだ、意外」
「もうやだしにたい」
「死んだらダメよ」

ちょこっと、ちょこっとだけね。いじめたくなった。涙目のぬえの破壊力はハンパなかった。
人差し指でそうっと背筋をなぞる。耳にふうっと息を吹きかけて、ささやく。

「私のこと考えてしてた？」
「……」
「本当のこと言ってよ、別に怒ったりしないから」
「け、けいべつするでしょ！」
「私のこと考えててくれたんなら、嬉しいな」

うろたえる様が面白おかしくて、そんでもって可愛い。目をぎゅっとつぶって、ぷるぷる震えている。
もうこれは答えを言ってるようなものじゃないの。真っ赤になった耳が目について、あむっと食べてみた。

そうだ、牛乳を飲もう　その５（後書き）

ギリギリＲ－１５…か？

そうだ、牛乳を飲もう　その5

喉が渇いて仕方なくて、ぬえが引き止めるのも聞かずに部屋を出た。風に当たって頭が冷静さを取り戻す。

私…、ぬえと…愛し合ったんだ。

だるくて足をするように歩いているとまだ明かりのついている部屋があった。

一輪の部屋だ。中から書き物の音がする。なにか準備してるのかしら？

「いちりーん。まだ起きてるの？」

「えぇ。掲示物変えないといけないから夜更かししちゃってるわ」

「うーん…眠い」

「中道っていいでしょう？　あと水蜜のだらしないとこ嫌いじゃないけど、それ見たらぬえ怒るわよ。胸もキスマークも見えてる」

「えっ！！」

慌ててさっと隠した。くすくす笑う声に、今はちょっと馬鹿にされたんだと思ってムカついた。

一輪の馬鹿。とつぶやくと、私が馬鹿なら水蜜は大馬鹿ね。とあしらわれる。

「……私のあと、いっぱいつけたいのに上手くつかないの」

「なら噛み癖なくすところから始めないとね。爪あと残らないわよ？」

好きも、愛してるも今なら分かる。きちんと伝えられる。

「爪を噛むのは完璧にやめるけど、噛み癖は直さないわ」
「なんで？」
「だって私の噛みあと、つけたいもの！」

そんなこんなで、私は今でもお風呂上りに牛乳をコップ一杯飲むのが習慣となっている。
なんでって？　爪が伸びるような気がするから。あ、でも前より硬くなって割れにくくなった。
イライラするのが抑えられるような気がするから。
正直、ぬえと恋仲になってからイライラするのは、ほぼなくなった。
それはそれでムカつくんだけどね。

背が伸びるから。背は抜かされたくない。いつまでもこの優越感は渡さない。
私の方がちょっとだけ高い。これがキスしやすい差だって知って、余計に喜んだのは内緒。
胸が成長するような気がするから。柔らかいのが好きなんだって。
ばか。へんたい。えっち。

「ムラサ！　おっぱい触らして！」
「馬鹿ぁ！！」

片手は牛乳パック、もう片方はグラスで塞がっていたので蹴り上げた。
きゃん！と犬だか、どこぞやの死神みたいな声を出して逃げ転がっ

ていく。ほんと、馬鹿な子！
牛乳を注いだグラスを持つ私の手は、今日は薄ブルーのマニキュアで彩られている。
「海っぽいのがいい」とリクエストしたらこれを塗ってくれた。いったい何色持っているのやら。

遥か遠い、記憶の彼方の大海原を幻視して思いを馳せる。いつか、ぬえと一緒に海を見てみたいな。

「むらさぁ……ハグならいいでしょ？　ハグハグー」
「しょうがない子ね。ほら、おいで」

本当に馬鹿な子。
ばかばかばか。でもって馬鹿な私。
ねぇ、お願いだからさ、離さないでよ。

「ぬえ、大好き」

首に手を回して抱きついて、その首筋にそっと噛み付いた。

――…　かぷっ！！

夏ですよー

じわじわと蝉が鳴き、汗が吹き出す。照りつける太陽が容赦なく体力を奪い、些細なことにもイラつく。
心なしか蝉が鳴くたびに暑くなっていくような気さえする。微弱な風が吹いて、軒先にぶら下げられた風鈴がりぃん…と申し訳程度に鳴る。

「あー何でこの世界には海がないのかしら。暑い、あつい、死んじゃうわ…もう死んでるけど」

畳にへばりついて溶けそうなムラサは呟いた。嫌なこともあったけど、やっぱりムラサは海が好きだった。
今願うことは冷たい海水に頭からどぼんと飛び込んでばしゃばしゃ自由奔放に泳ぎ回って涼をとりたいということだけだった。
頭の中には海。心の中にも海。口からも海。暑さにやられて呻いていた。

「海、海行きたいよぉ、……海ぃ、うみいいいい」

村紗水蜜、舟幽霊。水とは切っても切れない彼女である。
白いセーラー服は汗を吸いすぎてぐっしょり重みを感じていた。

「海行きたいよぉぉぉおおおお！！！！　暑い、太陽の馬鹿野郎！！！！」
「ちょっと、さっきからうるさいんだけど！？」

蝉に負けないくらいの大声を上げたムラサに、畳の隅に同じようにへばりついている黒ずくめの少女が抗議の声を上げる。

「うるさいから黙ってて、余計に暑く感じる」
「あんたこそ、その格好どうにかしなさいよ。真っ黒けっけで見てるこっちが暑苦しいわ」

黒ずくめの少女、ぬえはバツが悪そうな顔をして黙った。たしかに少し暑いし、暑苦しい見目だという自覚は嫌というほどあった。けれど夏服用の薄い生地のワンピースだし、なによりこのデザインが好きなので違う服を着る気にはなれない。

「あとその長ったらしい髪も切ったら？　さっぱりするわよ？」
「嫌よ、髪は女の命でしょ！」

ムラサはつい先日、肩につくか、つかないか…という長さまで髪を切った。
だからぬえのセミロングの髪が汗で首に貼り付いているのがどうも目につく。

私が切ってあげようか？というムラサの提案をぬえは即座に断固拒否した。

「ねぇそれ白い服だからブラ透けてるよ」
「えっち！」
「そりゃどーも」

ぬえはムラサの胸部に手を伸ばし、意地悪しようとしたがムラサはぱしんと払いのける。
のけられて、伸びた爪が並ぶ手は、猫のようにきゅっと丸められた。
ぐぅと唸る。

「そっちこそ、ミニスカだから捲れてパンツ見えてるわよ」
「すけべ！」
「おあいこさまよ」

ムラサはぬえの捲れたスカートあたりに足を伸ばす。
さらに捲り上げようと足癖悪くスカートに触れるが、ぬえはパンツが見えるのもお構いなしに其れを足蹴にした。
蹴られて、ムラサは胎児のように足を抱えて丸くなった。むぅと口を尖らす。

そうやって黒髪少女たちはやいのやいのと無意味な会話を繰り返し、熱を帯びた背中を救うために新たな冷たい畳を求めて転がった。
ごろごろ転がっているうちに手がぶつかった。重なって、見つめあう。どちらともなく、汗でべとつく手を握った。

「ぬえ、あんた顔赤いわよ」
「そっちこそ」
「私は…暑いだけよ」
「私だって…！」

双方ともに、手も視線も外さない。気のせいか、更に気温が上がっているような気がしていた。
蝉の声と肌を伝う汗の感触だけをやけにリアルに感じる。どきん、どきんと鼓動が鳴って、ごくりと唾を飲む。
乾いた唇を無意識のうちに舌舐めずりしていた。瞳に焔が灯る。

「あらあら、熱いわねぇ」

ほくほくと湯気の上がる盆を携えた一輪が颯爽と襖を開けた。
風が部屋という部屋を駆け抜けて一抹の涼しさを与えてくれる。

「「い、いいいい、いいいいちりん！！！！」」

おまけに火照った体も幾分か冷ましてくれたようだ。二人とも素っ頓狂な声を上げてパッと手を離す。

あーとか、うーとか呟いてみたり、こめかみのあたりを掻いてみたりする。バレバレであり、逆効果である。

「そのまま続けても良かったのよ？」

「いや、あの、ホント勘弁してください」

ぬえは両手と6本の羽全部を使って畳に伏せ、平謝り。対するムラサは「え、いいの？」などと抜かしている。

一輪は笑みを絶やさない。……命蓮寺は今日も平和だ。

「ね、一輪、それなに？　いい匂いするけど…」

「あ、そうそう。これ今日のおやつね」

未だ畳に別の意味でへばりついている　ぬえを余所に、ムラサは盆にかけられた茶巾をちらりとめくる。

もあっとした湯気が立ち上り、それが晴れると真っ黄色の物体があった。

つやっとしていて、ぷりっとしていて、食べる前から「おいしい！」と言えそうな代物だった。

「トウモロコシだ！　すごい、もう市場に出回ってるのねー」

「え、トウモロコ、シ…？」

「ぬえ、顔を上げなさい。あなたこれ好きでしょう？」

額に畳のあとがついて間抜け面なぬえはぽかんと黄色い山を見つめ

ていた。開いた口がふさがらない。食指が動くのか、指先だけ細かに動いている。
ムラサはぬえとトウモロコシを結び付けようと躍起になって考えていたが、無理だったので直接本人に聞くことにした。

「え、ぬえ、トウモロコシが好きなの？」
「うん、実はすごく好きで…一輪すごいね、何で、知ってたの？」
「この前、雷獣に関する書物を読んでね。まさかとは思ったんだけど、今日　八百屋さんに行ったら売ってたもので、つい…」
「やったぁああ！　一輪ありがと、大好き！！」
「どういたしまして。さ、二人とも召し上がれ」

ぬえは顔ほどもある大きさのトウモロコシを手にとり、子どものようにはしゃぎながらかぶりつく。噛んだ瞬間に汁が溢れ、甘く濃厚な香りが口内に広がる。
縦に横に。ぐるぐる回しながら。夢中になって食べるぬえをムラサと一輪は後ろから見ていた。

「なによ、あんなに嬉しそうな顔しちゃってさ…」
「あら妬けるの？」
「別に」
「相手は野菜よ？」
「……知ってるわよ、一輪の馬鹿！」
「はいはい、ほら水蜜もあっちの縁側で食べてきたらいいわ。ついでにぬえも引っ張って。あの調子で食べられたら畳に汁が飛んじゃうから」
「はーい」

――りぃん、ちりりぃん。

開け放した襖の向こうから風が吹いて、さっきよりも風鈴らしく揺らめきながら心地よい音を立てる。
相変わらず蝉はうるさいし、太陽も憎たらしいくらいに元気だったがさっきよりは暑さを感じなかった。
二人は縁側で足を投げ出し、ぶらつかせながらトウモロコシをかじる。

「ぬえ、おいしい？」
「うん、これすっごく甘いね。それに湯で加減もちょうどいいし」
「好き？」
「うん！」
「私のことはー？」

んふふと笑いながら尋ねるムラサに、ぬえはより一層微笑む。

「大好きだよ、水蜜」
「それだけじゃ嫌だ。さっき一輪にも大好きって言ったでしょ」
「気にしてるの？」
「ちょっと怒ってます」
「えーどうしたら機嫌直してくれる？」
「キスして、ぬえ？」

二人してくすくす笑って。くっついて、触れて。距離がゼロになるまで。
鼻から息が抜けて、くたりと力が抜けて、ムラサはぬえに寄り掛かる。

「今日のキスは甘いね。トウモロコシ味だわ」
「水蜜の唇のほうが甘いよ」
「うそばっかり」
「本当だよ」

ぴゅうと風が吹いて、風鈴が涼しげな音を立てる。

手を繋いで、擦り寄って。
さて、暑い暑いと呻いていたのはどこの誰だったか。

そのあと、一輪は氷水を張った桶を持ってきてくれた。二人は我先にと足を突っ込み狭い桶の中で押し合いへし合いの場所取り合戦を繰り広げた。
其れを襖の向こうから覗いていた星とナズーリンは熱くて敵わんと退散する。
桶には白い４本の脚がまぶしく輝いていて、同じく覗いていた聖は若いっていいわね…と仏の笑みを浮かべていた。

夕飯はそうめんで、透明の器に入れられた白い麺が視覚的に涼しく、また冷やされた麦茶も併せて食感的にも涼しくしてくれた。
食後に「花火がしたい」という話題が上り、なら今度買ってみんなでやろうと満場一致で決定した。

「みなみつー、髪乾かしてー」
「えーまた？　自分で乾かせるでしょ？」
「だって面倒なんだもん」

ぬえは毎日風呂上りに髪を乾かしてくれ！とムラサに要求する。そしてムラサも、面倒と言いながらも満更でない表情で構ってやる。がしがしとやや乱暴にバスタオルで拭いてドライヤーで乾かして、仕上げに櫛で梳く。癖のないさらさらストレートが完成した。

「ほら、だから私が切ってあげるって言ってるじゃない」
「嫌って言ってるの！」
（だって切ったら構ってもらえる時間減っちゃうじゃない？）

「さー寝ますか」
「ん、ぬえ布団引いてね」
「はいはい」
「はい、は一回でよろしい」
「はーい」

ムラサはぬえが布団を引く間にぶたの形の蚊取り線香に火をつける。練り込まれた薬草の香りが漂って夏を感じた。

「いいよー」
「ありがとう、じゃ寝よっか」
「うん、おやすみ水蜜」
「おやすみなさい、ぬえ」

布団にもぐりこみ、薄い掛布団を羽織る。明日も暑いだろうけど頑

張ろう。

二人は仲良く手を繋いで眠りに就いた。

翌朝。蚊取り線香を焚いたというのに、彼女らの首元に吸われたような痕があったとかなかったとか。

ぬえむらは少量でもげろりと甘い（前書き）

ぬえとムラサは常時これくらい甘いと思ってます。タイトルはことわざ『山椒は小粒でもぴりりと辛い』より

ぬえむらは少量でもげろりと甘い

「この『ポッキー』っていうの、二人で両端から食べて残り５ｍｍまで食べたらいいんだって」

説明するムラサの綺麗な指しか目に入らない。ポッキーといわれるものを持っている。白魚のような手……というわけじゃない。だけど私には綺麗に見える。大好き、だいすき。錨を扱う大きな手。この前大きさ比べしたら私よりちょこっと大きかった。

「外の世界では１１／１１や２／１４にこのゲームをやるんだって」

説明する水蜜の口しか見えない。忙しなく動く。赤い唇が動くたびドキリとする。ふっくら柔らか。大好き、だいすき。時折、歯や舌が見える。私の名前を呼んでくる。想いを囁けば愛してると応えてくれる。

「これは罰ゲームに使われるものなんだって。おいしいのに」

ぱり、ぽり、と。

ムラサはポッキーを食べた。チョコレートがかかった部分がどんどん飲み込まれていく。あっという間に食べられた。

「ぬえ、やろっか？」

歯で挟んで、んーと唇を突き出した。目を閉じる。緑の瞳が隠れた。睫毛が揺れる。

私は向かいに手をついてもう一方の端を含んだ。その振動に反応してムラサの目が開く。水蜜の緑と私の赤が交差する。微笑まれた。

私はニヤリと笑い返す。歯を立て、ぽきり。とポッキーを折る。ムラサがくわえたままの部分ごとさっと奪って全部食べた。甘いチョコレートの味がした。

「え、ぬえ…なんで？」
「失敗したら罰ゲームでしょ？　どんな罰？」
「……キス、するんだって」

まどろっこしい。初めからキスすればいいのに。あぁでも、焦らすからいいのか。
乗りかかってキスをした。唇を触れ合わすだけのキス。ムラサは大人しく目を閉じていた。最後にちゅう。と音を立てて吸うと首の後ろに手を回され、抱きつかれた。

「罰ゲーム、なった？」
「こんなの…どっちにもご褒美じゃない」
「そうかもね。ね、どんな味がした？」
「……チョコレートだった。甘かったわ。でも足りない」
「ねぇ水蜜。なにがほしい？」

とびきりに。うんと甘いの。

耳元の声は熱っぽかった。
ならば。ぐずぐずに蕩けるようなのをあげようか。
ひとまずは……。

「愛してる！」

とびきりの、言の葉を。

がぶ☆ぺろ☆ちゅっちゅ！（前書き）

前半はムラぬえっぽいですが、作者のジャスティスはぬえむらです。
この子たちが延々とお互いをかじりあって、ぺろぺろしあって、ちゅっちゅしあう話はどこに行けば読めますか。

がぶ☆ぺろ☆ちゅっちゅ！

風呂上り。長い髪を手前に持っていき、タオルで乾かしたり、櫛を入れたりと丹念に手入れをしている彼女がいた。普段見えないうなじが無防備にお目見えしていて、どきりとする。背中は前屈みの猫背で歪んでつぶれていて、実際の座高よりも低く見える。身長だってほんとは私より大きいのに猫背のせいで小さく見えるし。もったいない。星のようにすらりと高身長ではないけれど、ハグしてふぎゅっと抱きしめられると頭まで包まれて安心する。ちゅーするのにも、たまに背伸びするくらいには彼女は大きい。態度が子どもっぽいからあんまり分かんないけども。

「ぬえ」

大好きなひとの名を読んでみる。気付いてくれるかな？とか、どんな顔して振り向くんだろう？とか。あったか恥ずかしい気持ちでぽわんぽわんってなる。産毛もほとんど生えていない真っ白な首すじから石けんのにおいがして、夏の暑さで滲み出た汗と混じって世界にいっこだけの香水みたいに香っていた。

……振り向いてくれない。気が付かないのかな。たしかに小さな声で呼んだんだけど。抜き足、差し足で忍び寄って、一見頼りなさそうな肩に手をかけた。

「うひゃう？！」

「これぐらい気付きなさいよ。敵だったらやられてるわよ？」

「いや、ここは安全だって思い込んでるから…」

まるで猫が全身の毛を逆立ててびっくりしたような反応だった。

それは、つい、意地悪をしたくなるくらいには可愛い反応。

「さっき呼んだんだけど。ぬえってば酷い！」
「い、いやね、ムラサってば空気みたいなモンだし」
「なぁに、いてもいなくても変わらないって言いたいの？」
「ち、違うわよ逆！　いるのが当たり前で、でもっていないと困るの！！」
「へぇー？」
「あっ……」

言ったあとに言葉を反芻して、顔が赤くなっている。無意識にこういうことを、さらりと言ってくれるのは、正直……嬉しい。なんにも考えない状態で、彼女の中に私がいるんだなって分かるから。だけど、どう見てもさっきより髪を乾かす手が早くなっている。こうやって恥ずかしがってるのを見ると、余計に愛しく思えてくる。別に男の人みたいに強く、逞しく、カッコよくっていうのを求めているわけじゃない。だから彼女のめいっぱいで私を愛してくれてるのを感じられれば、それだけで十分に幸せ。

ぐにゃりと歪んでいて、湾曲している首の骨が目について、釘づけになる。煮込んだらいいダシが出そうとか、丸焼きにしたら上等な一品になりそうだとか、ただ単純に、かじったら美味しそう…だとか。

頼りなさそうな両肩に手を置いて、背後にどっかり陣取って背中にもたれかかった。けして広くはないけれど、私はこの背中を信頼している。小さく見える背中は実はしなやかな筋肉で覆われていて、頸椎から尾骨まで続いている。幻想郷ルールだけで飛んでいる私と違って自力で飛ぶことができるから、私にはないがっしりとした筋肉が無駄なくついていて、美しかった。普段は柔らかく、しなやか

に。瞬発力を必要とするときだけ盛り上がってばびゅん！と飛ぶ。脂身が少なくてたんぱく質が多そう。まるでササミね。

「羽が刺さるわ」
「だって仕舞ったら背中ツーッてやるんでしょう」
「何か文句あるの？」
「だって、あれ、痒い、」
「無いわよね？」
「……ない、です」
「分かればよろしい」

赤青3対、6枚の羽があっという間にどこかへ消える。この薄っぺらい胴（言ったら怒られそう）のどこへ仕舞っているのか、常に不思議でならない。肩甲骨が薄いパジャマの布地から盛り上がっている。遊ぶように指を這わせた。ふにゅぅぅと腑抜けた声を出してくすぐったそうに身を捩るけど無視してくすぐる。背骨に沿って首からおしりまでなぞる。ついでにおしりをもっちゃり、むっちり撫でまわす。お次は下から上の方まで逆撫でしてみた。

「髪いじっててていいわよ」
「む、りぃ」
「ふふ、可愛い」

左手はお腹の方に回して抱き寄せる。頭をぐりぐりして、耳をくっつけた。鼓動とぬくもりを直に感じて幸せ。口元がちょうど彼女の首すじにきたから擦り寄って、ふぅ……っと息を吹きかけた。そしたら面白いくらいに体が跳ねて、気分がよくなる。いつも悪戯されてばかりじゃ割に合わないから、仕返しよ？
れろりと首すじを舐める。私は彼女と違ってやっぱり人間だから、舌のざらざらがあんまりなくて、摩擦が少なくてつまらない。風呂

上りのにおいが時間と共に変化していって今は体臭の方がやや勝っていた。私にだけの媚薬みたいで頭がくらくらする。

「はぁ、はぁ……ぬえぇ」
「あっ、んぅ…！」
「くすぐったい？」
「みなみ、つぅ…こしょぐったいよぉ」
「知ってる？　くすぐったい所ってね、性感帯になる素質があるんだって」
「そんな、……豆知識いらないってば」
「こしょこしょ」
「ふぁう、背中やめてって」
「うりうり、うりゃー」

ああ、もう、ぬえってば可愛いなぁ…。

「いい加減に怒るわよ？」
「えっ？」
「人間は妖怪に食べられるものなんだから！」

油断をしていた…あらあら、押し倒されてしまいました。もう、遅いんだから。このヘタレ！

「痛かったら言ってね」
「歯医者みたいね」
「鵺です……あむっ！」

羽を広げた彼女に上に乗られて、喉元に噛み付かれた。凹んだ部分が多い喉だけれど、彼女の牙にかかれば何の問題もなく皮膚に届く。本気で噛み砕くような強さはないけれど、甘噛みというには些

か凶暴なじゃれだった。鼻息荒く、夢中になってくれるのはいいとして、やられる身としてはちょっと痛い。鎖骨に噛み付かれてちくりとした痛みが走った。がむしゃらに、がじがじと食いついてくる彼女の頭を撫でる。まだ風呂上りの湿り気を帯びていた。

「ムラサぁ……あとつけていい？」
「だぁめ」
「何で？」
「だって前の消えてないもの」
「消える前につけたいの」
「このケダモノ。私にマーキングなんてしなくても誰も取りゃしないわよ」
「やだやだ、つけたいの、ちゅー！！」
「待て！」
「うっ……！！」

ぴしっと硬直して彼女が動きを止める。中途半端に出た舌が間抜けで可愛い。私の出す号令を律義に聞いて守ってくれる。顎下をくすぐるように撫でて、耳の後ろを掻くように、髪に指を通してやると「もっとやって！」と言わんばかりに伸びをした。でもここでやってあげたら面白くない。

「お・あ・ず・け♪」
「ぐるるる……」
「それに私、つけられるより、つけるほうが好きなの」
「うがぅ！　けちんぼ！」
「髪乾かしてあげるから大人しくしてなさい」

＊　＊　＊

彼女の髪は真っ直ぐさらさらで。私のうねった髪とはまた違ったさわり心地がある。うっとり目をつむった彼女の髪を乾かすのは、お母さんになったみたいな気分がした。ねぇ、あなたはよく乾かしてとねだってくるけれど、私の方がいじりたいということを知っているかしら？　おんなじシャンプーを使ってるのに、同じにおいにならないことを知ってるかしら？

「何だか眠くなってきた……」
「いっつもそれね」
「だってムラサの手が気持ちいんだもん」
「ほれほれ。褒めても何も出ないわよ」
「んぅぅ……、はぅ…」
「ちゅーしようよ、ぬえ」

「ん」

振り向いた彼女に肩を掴まれ、頭を固定された。唇が触れて、私は反射的に目を閉じる。ちょいちょいと背中をつつく合図を出すと無言で抱きすくめられた。これが一番安心する。彼女の腕の中は私の特等席！

ちゅっちゅと小鳥のように可愛らしく啄むキスや、んべぇと伸ばした舌だけを口外で絡ませあうキスも好き。だけど、息もできないくらいに唇をぴったり重ね合わせてゆっくりと愛を確かめあうキスが一番好きだったりする。体中をすりすり擦られて腰が抜けたみたいに脱力してしまう。舌を伸ばすと絡めとられて、とんがった牙で甘噛みされた。

「ん、ふっ……くぅ」

鼻から息が抜けて甘い声が漏れ出てしまう。無意識で肩に爪を立てていた。

「んーー、ちゅう、ぱっ」

「はぁ、はぁ、あ……」

「ムラサの顔、やーらしー」

名残惜しそうに口周りを舐める彼女の方がやらしいと思う私はぬえ馬鹿もいいとこなのかもしれない。

でも……好きだし。ねぇ？

「顔真っ赤。りんごみたい」

「あら、空気じゃなかったの？」

「もぅ、終わったことほじくり返さないでよ！」

「私に勝とうだなんて１００年早いわよ」

彼女にとっての私が空気なのならば。私なしでは呼吸もできないくらいの関係になりたい。

でもって、酸素に触れてもっと激しく燃え上がるような恋にしたい。

「じゃあ１００年後も一緒にいようね」

「まぁた、そういう嬉しいことさらりと言う……」

「ぬゅふふ。ちょっと恥ずかしいけどね！」

あぁ、もうぬえの馬鹿！　大好き！！

甘いものが食べたい（前書き）

すっぱ甘いと甘酸っぱいのニュアンスの違いは、すっぱ甘いはすっぱい、甘酸っぱいはだいたい甘い。くらいに思って下さい。

甘いものが食べたい

甘いものが食べたい。

寺の経費と、それとは別の家計簿とをつけていたムラサは急に思った。ムラサは読み書きそろばんを満足に習ったことがない。できなくはないが数字の羅列を見ているだけで頭が痛くなってきて大変疲れる。しかし頭痛の原因はそれだけではなかった。

今月の寺の経費は弾幕ごっこの修理代がかさみ、紙や墨が満足に買えない。あと意外に高いのがお供え物。どうせ置いておくだけだし、さらにいえば後で食べてしまうのだから、ずっと飾っておける干物や干菓子を置けばいいとムラサは思うのだが。

きちんと数や種類が決まっているらしく、聖のお願いもあって本像前にはいつも瑞々しい青果が誇らしげに溢れている。しかも毎日取り替えるのだからもったいないなぁとしか思えない。

片面だけ鯛を食べる殿様にひっくり返した鯛をもいちど出すという昔話ではないが、なにかしら同じような方法で日持ちさせられないのか。もったいない。

そして普通の家計簿も火の車。二尾の赤猫も真っ青なくらいのやりくりをムラサは随分長いこと繰り返していたのだった。収入がないわけではない。しかし聖は優しすぎるのだ。設備を増やすだとか、言い方は悪いが檀家を増やすための施しとかなら分からなくもない。いや分かろうとするだろう。

みんな無駄使いが多いのだ。あれが欲しい、これが欲しいといえば聖はオーケーを出してしまう。そうしたらムラサも泣く泣く財布の紐をゆるめるしかないのだ。

これ以上経費からは一文たりとも減らしてはならない。しかし疲れた。どっと疲れた。甘いものが食べたくて仕方がない。ムラサは奥の手を使うことにした。

星の部屋にこっそり忍び込み、そっと戸を閉めた。宝塔が紫色の座布団の上に鎮座している。携帯しなくて良いのかという疑問はこの際放っておこう。宝塔には砂鉄こびりつく磁石のように、びっしりと小銭が張り付いていた。もはや星の能力は宝塔の能力なのではないかと疑うほどだ。

ムラサはそこから何枚かくすねてポケットに頂戴した。これで里で何か買おう。どうせ小銭がなくなって宝塔が剥き出しになったところには、また新たな小銭が張り付くだろうから問題ない。

逸る気持ちを抑え、来たときと同じようにそっと部屋から出る。あとは火元と戸締まりをしっかり確認してから人里へふわふわ飛んでいった。

和菓子というものは総じて美しい。四季の移り変わりを目で感じることができる。でもって甘い。洋菓子というものは総じてキラキラしている。卵やシロップでつや出しした表面など輝いて見える。でもって甘い。

お菓子屋の軒先で固まりながら考察すること数十分。何を買おうか悩む乙女の横顔は恋する表情に通じるものがある。ムラサは甘いものなら何でも好きだった。甘味に貴賤なし。どれも口中を楽しま

せるものに変わりはない。
勝手に買い食いしたとバレてはあまり良いことはない。さらに手持ちはあまりない。また食べ過ぎても夕飯が食べられなくなって一輪を悲しませる。手頃なサイズ、値段、満腹感。でもって甘いの。欲をいえば保存して今日以降も食べられるもの。これらを満たす素晴らしいものを多種多様な陳列品から選び出さねばならなかった。

「あ……、おじさんこれ下さい」

茶色の包みに入れてもらって意気揚々と命蓮寺へと帰る。途中いくつかのカップル共の痴話喧嘩に巻き込まれそうになったが華麗にスルーした。一輪が夕飯を作り始める前には何事もなかったかのようにシャンとしていなければならないからだ。

中庭にふんわり降り立ち、周りに誰もいないか見渡す。さながらスパイのように前後左右の人影を確認してからこそそっと自室へ飛び込んだ。ムラサも何だかんだで聖にねだり買ってもらったものがある。ぼわぼわでいつまでも触っていたくなる心地のクッションだ。その薄ブルーの短い毛足のクッションに寝転がって大きな息を吐いた。もう計算はうんざりだ。

「誰か代わりにやってよね……ナズあたり算盤得意そうなのに」

茶色の包みをがさごそして取り出したるはちんまい瓶。その中には夢が詰まっていた。

「あー……でもそしたら私のお仕事なくなるかしら」

仰向けになり、瓶を日に透かしてみた。色とりどりの飴玉が誘惑するように輝いて瓶中を転がる。ムラサは飴玉を瓶に詰めてもらったのだった。

個数を指定して買えばそんなに高くない。瓶に入れていれば保存はきくし、ひとつひとつは小さいので食べきれる。見た目も美しく、特に転がっていく様はいつまでも見ていたくなるような光景だ。ゆっくりねぶれば長く楽しめるし、ボロボロこぼすこともない。もちろん寝そべって舐めることだって可能だ。でもって甘い。

女の子にとって甘いは正義である。おかしとは。体中の強張りが抜けてふにゃふにゃになるだけの魔力を秘めたる素晴らしいものだ。

「どの味にしよっかなー」

瓶を振って飴がぶつかる音を楽しむ。味を選ぶ楽しみだってある。ムラサの目には、その瓶は小宇宙のように映る。その小宇宙の中から最もふさわしい味を選び取るのだ。

「……まずは、レモンにしよう」

職務から解き放たれ、自室でだらだらと甘味を頬張るムラサはただの女の子だった。

すっぱ甘い飴玉が口中を転がる。歯に当たって、かこんかこん鳴る。世の中では。はじめての口づけというものはどうやらレモンの味がすると言われているらしい。ムラサは己の記憶を探った。味蕾は確実にすっぱ甘いという刺激を受け取って、同時に胸中は甘酸っぱい記憶が蘇っていた。

―――『む、むらさぁ……ね、キスしていい？』

そう尋ねられたときの照れた表情、上ずった声、やけに強く握られた両の手。落ち着かない自分の心、熱いまなざし、うるさい鼓動。それらの全てを今でも鮮明に思い出すことができる。近づいて感じた吐息、触れたくちびるの感触、柔らかさ、湿り気、ぬくもり。記憶の糸を手繰り寄せては恥ずかしくなる顔を隠すためにクッションに突っ伏す。そのままごろごろ転がった。

はじめての口づけはレモンなんかではなく。

とろけそうにあつく、ひたすらに甘かったことをはっきり覚えている。

「う、うわあぁあああ、やだ恥ずかしいぐっ、うう？」

レモン味の飴玉は臼歯に押しつぶされ粉々に砕け散ってしまった。あーぁ、勿体ない。ムラサは落胆しつつも飲み込んで次の味を選ぶことにした。

「ねぇ……さっきから何やってんの？」

呆れ声がして、顔を上げるとそこには。

「暑さで頭でもやられたの？」

はじめての口づけのお相手がいた。

ムラサは至極慌てた。いや、素面を顔面に貼りつけて「別に？」

と返しても良かったのだ。そうできなかったのは、やはり惚れた弱みなのか。目の前の少女がいると、どうにも自分は自分でなくなるらしい。それとも。まったくの逆で彼女がいるから自分は自分になれるのか。教えてよ、ぬえ？

「何してたの？」

「あんたこそ」

「山の巫女んとこにお使い頼まれててね。今戻ったとこ。ついでに神様からお酒貰ってきたのよ！」

酒瓶ぶら下げどや顔で決めるぬえはちょっと滑稽だった。クッションに突っ伏しすぎたせいで額に赤いあとが残ったムラサもなかなかいい勝負ではあったが。

「あ！！　それ飴買ったの！？」

「うげっ……！！」

「えー私にもちょうだいな。あといい加減そうやって隠れて買うのはやめた方がいいと思うけど？」

「だって怒られ、」

「るわけないじゃん。みんながどんだけ甘いか分かってないの？」

ムラサは今までにもこうやって内緒でおかしを買って見つかったことがある。しかし、ぬえが言うように怒られたことない一度もない。怒られないだろうと分かっていても、なかなか言い出せないのだ。だって「え、おやつ足りないかしら？　大変、明日から大量に買ってくること」とかになって余計に家計が火の車になるのは目に見えている。家計圧迫をしないためにわざわざ宝塔からひっぺがしているのに……。

「あ、そっか今度から星に言えばいいだけか。それにもっと弾幕ご

っこする場所をきちんと指定しておけば修理代かさまないし」
「飴ちょうだいって。いちご欲しい、いちご」

ぬえはしゃがみこんで瓶をムラサから奪いとる。あっと短く不満の声が漏れた。

「いちご、いっこしか、ないね」
「だって私だけのために買ったんだもの」
「じゃあ一緒に食べたらいんだよ」
「……ばかでしょ」
「頭いいと思うけど？」

そう言うや否や、ぬえはピンクの飴玉ひとつぶ口に放り投げ、ムラサの肩を掴んだ。

「ムラサ、べーってして」
「ん、え。べ、べーっ？」
「そう。キスするね」

唐突に触れる濡れた唇、甘い舌。ざらめの付いたいちごの飴玉は二人の間を行き来する。舌で押し込んで、ついでに甘い唾液も流し込んで。舌の上に受け取って転がす。ざらめが取れるたびに甘さは増す。いちごの甘ったるいにおいが鼻についた。

「んくぅ、ちゅう、ちゅちゅうううううう」
「はぁ、ちゅるるう、くちゅん、ちゅ、ちゅ……」

ぬえのざらりとした舌がムラサの口内にある飴をねぶる。互いの舌と舌で飴を挟んで両側から少しずつ溶かし舐める。かたまりが溶けていくたびに、理性もとろけだす。ムラサはすがるようにぬえに

抱き着いていた。
どちらのものともつかない唾液と声が口から漏れ出す。ちょうど二人の間にあったクッションに垂れていった。薄ブルーが次第に濃い青へと変わっていく。主成分は飴玉だからどろりと粘着く液体が毛足に絡む。こいつらイチャつきやがって。爆発しろ。そんな呪いでもかけているようだった。

「んやぁ、っ……ふぅ、んん」
「———ちゅ、っぱ。甘いね」

かつての恥ずかしがってキスの許可を求めるぬえはもういなかった。ギラついたまなざし、荒い呼吸。誘うように覗く赤い舌がちろりと口周りを舐めていた。強烈にいちごの味がして、だけどやっぱり、とろけそうにあつく、ひたすらに甘い。

「いちごが甘い、ざらめが甘い」
「えーそれだけ？」
「……ぬえとのキスが、あまい」

ムラサは、ぬゅふふと笑う声が耳元にして、気が付くと抱きすくめられていた。頭をよしよしと撫でられる。体は脱力していってぐにゃんと伸びた。

「毎日お仕事お疲れ様。ムラサはえらい、頑張ってる、よしよし」
「ぬえ……」
「まぁ甘いものの一つや二つも欲しくなるものよね」
「あんたが毎日ぎゅーってしてちゅーってしてくれたら買い食いやめるかも」

きょとん顔のぬえにムラサは迫る。早鐘が胸を打つ。

ぬえはムラサを撫でる手を止めない。

「んー……。じゃあさ、どれも一緒にやったらいんだよ。ぎゅうも、ちゅうも、甘いものもね？」

「……ばかでしょ」

「頭いいと思うけど？　ぬゅふふふ」

ムラサの胸のどきどきは鳴りやまない。むしろ悪化する一方だった。

「ううん。ばかよ。だってそれだけで我慢できるはずがないもの」

「み、なみつ……うあああああああ大好き、愛してるうううううううううう」

ぬえとムラサが幸せの鐘を鳴らす日はそう遠くないかもしれない。

バカップルさん、お幸せに。

ハグの効能（前書き）

この二人がいちゃついて幸せだといいです。あ、ぬえむらが好きです

ハグの効能

「ねぇ、ハグしよう！」
「寝ぼけてんのかこの妖獣」

これは、命蓮寺のよくある日常を切り取った話である。

封獣ぬえという少女はどうにもこうにも村紗水蜜のことが好きだった。
寝ても醒めてもムラサ。夢の中でもムラサ。うふふ、あはは。
ねぇー待ってよ、待つかこの妖獣、もうムラサったら恥ずかしがりやさんなんだからぁ！
ぬえが好物のパフェを出されても3秒だけ悩んでからムラサをとるくらいに好きだった。
いや、この数字はぬえにしては驚異的な数字なのだ。
誕生日ケーキのろうそくの火を自分の代わりに吹き消されたとしても。
クリスマスケーキの甘いサンタさんをかじられても。
瞬殺じゃなくて半殺しくらいで許してあげようと思うくらいにムラサのことが好きだった。

寒い冬の日には背中に手をつっこんで暖をとるくらいに。
むき出し魅惑のひざ裏を見るとひざカックンしたくなるくらいに。
料理の中に自分の嫌いなたまねぎがあるとムラサの皿に移動させるくらいに。
手を洗ったらその水滴を顔にぴっぴっと飛ばすくらいに。
いたずらといやがらせが、微妙な信頼関係との上に成り立っている

二人なのである。

え、好きじゃなくない？という問いは野暮である。
正体不明であるぬえは思考そのものも正体不明であり、もはや常人には理解できないレベルなのだ。

「妖獣じゃなくって妖怪だって何回言ったら分かるの」
「私にはあんぽんたんな獣に思えます」
「じゃあ百歩譲ってケモノでいいからハグして！」
「いや、その脈絡はおかしい」
「ちゃんと許可とるだけ紳士だと思わない？」
「思わない。せいぜい淑女」
「うん、女の子だもんね。って論点そこじゃない！！」

台所でムラサが洗い物をしている後ろで、ぬえは椅子に座っていた。
いや、座っていると表現するのは語弊があるかもしれない。

「それやめなさい。床も椅子も傷つくから」
「んじゃあハグしてー、ハグハグー！」

椅子に反対向きに座り、背もたれに頬杖をついて、斜めに浮かせては下ろし。また浮かせては下ろし。という遊びを繰り返していた。
ぺたん、ぱたんと物悲しく音がたつ。けれど洗い物の水音の方が大きかった。

「ねぇってばぁ！　こっち来てよ！」
「これ終わったらね」
「もう洗い物ないでしょ？　いつまでやってんの」
「今から掃除するの。水回りはちゃんと綺麗にしておかないと、やつが出るわよ」

「黒い悪魔はいやだぁぁぁあああ」
「ならもう少し辛抱なさい。冷蔵庫にプリンあるの食べていいから」
ムラサが言うが早いか、ぬえはすっくと立ち上がり冷蔵庫へと直進。開けて、中の3番目の棚にお目当てのものを見つけた。
あまぁい黄色と、ちょっぴり大人な焦げ茶の黄金比率。おこさまに大人気のプリンだ。
ぬえの目は恋する乙女のように輝き、とろけた笑顔を浮かべる。
「それ、ほんとは私のなんだけどね。あんたがうるさいからあげるわ」
「やったね！　ムラサ大好き！」
「はいはい」
「もちろんプリン抜きでね？」
「……はいはい」

ムラサの手が一瞬止まったのをぬえは見逃さなかった。

「ハグってねーストレス解消にとってもいいらしいよ」
「私のストレスの最たる要因さんが何をおっしゃるか」
「他にもね、腰痛、肩こり、頭痛、関節痛、神経痛なんかにもいいって」
「なにその温泉みたいな効果」
「あと金運恋愛運アップして、宝くじ当選とか、恋人もできるってもっぱらの噂よ」
「なにその悪徳商法」
「ねぇーだからさ、ぎゅうってしようよ。あとで肩揉んであげるし」
「ウチにはただでさえ金運の神さまみたいな人がいるし。いいわ。お金なんてなくたって生きていけるし」

プリンは綺麗さっぱり平らげられ、ぬえは残ったカラメルソースを指ですくって舐める作業に移っていた。

「やめなさい、みっともない」
「ムラサしか見てないからいいじゃん」
「あんたは子どもか」
「取り繕わないでありのままの自分でいるだけだよ」
「あっそうですか」

「ムーラーサぁー、構って、ひと肌恋しいの」
「私以外にもいるでしょう」
「やだ。それに？　他の人とハグなんてしたら怒るくせに」
「……まぁね。今日の夕飯は何がいい？」
「からあげ食べたい」
「もうこのままついでに作るわ」

本格的に夕飯の準備にとりかかりはじめた水蜜を見て、ぬえは諦めた。
エプロン似合うなぁぬゅふふ、だなんて考えながら、まぁ今日じゃなくてもいっかと納得させる。
仕方ないから、金運の神さまをおちょくりにいこうか。それとも夕飯までお昼寝してようかな。
しぶしぶと席を立つぬえではあるが、後悔の色は見えない。こうやってあしらわれるのは日常茶飯事なのである。

「味噌汁の味見してって」
「それは、私が猫舌なの知ってのいやがらせかしら？」
「私からいやがらせしたっていいでしょう。なんかあんたの舌が聖の求める味に近いみたいなの。光栄だと思いなさいよ？」
「うぁーい」

ぬえはのたりのたりと歩きながら乗り気でないことを全身でアピールする。
しかし、その先にはエプロンとおたま装備の水蜜がいるから行くのである。
聖のためなんて、ほとんどどうでもいい。ぬえの第一事項はいつだって水蜜なのだ。
ムラサはおたまで汁をすくい、ふーふーと冷ますために息を吹きかける。
ぬえはそうやってるうちに間違えて唾でも入らないかなー、そうだといいのになーと考えながら待っていた。

「しっかり冷ましてね」
「ならいつも以上に冷ましてあげるわよ」

水蜜はおたまの汁を自らの口に含み、ぬえを引き寄せる。
二人は繋がって、しばし無言が訪れた。
油を入れていた鍋が、鶏肉の投入をまだかまだかと待つばかりで、それ以外の音は何もしない。

「おあじは？」
「……みそしるの味がする」
「濃い？薄い？」
「ちょ、うど、いいけど……あまいね」
「じゃあ味噌汁これで完成ってことで。部屋戻っててていいわよ」

「ムラサ」
「ぬえ？」
「ねぇ、好きなんだけど」

油は相変わらずじゅわじゅわいっている。

「知ってる。ぎゅうってしよっか」

「うん、そだね」

にへらと笑うぬえは妖獣でも妖怪でもなくただの子どもみたいで。

対する水蜜はお姉さんみたいだった。

黒髪と黒髪が合わさって、二人は密着する。互いにきゅうっとしがみついて、互いに相手を受け入れていた。

「ストレス解消なった？」

「ぜんぜん。それに何一つ効能はない気がするわ」

「ん？」

「恋人はとっくの昔からいるもの」

「……まあね！！」

命蓮寺ではこんなことが毎日起こっているのである。

——————————————————————————————

——————————————————————————————

——————————————————————————————

——————————————————————————————

（……なぁ金運の神さまとやら。私はお茶が飲みたいんだが、なんとかできたりしないのかい？）

（無理です。しかも全く関連性がありません）

（ムラサ……あんた油引火する前に消すか、早く鶏肉入れなさいよ）

（ぬえちゃんの味見で今日のお味噌汁の味も安定ですねぇ～）

地底の橋（前書き）

ぬえむらがネタ切れしたので、今回はパルスィのおはなし。緑色の目って可愛いと思うの。ああ、妬ましい、妬ましい。パルパルパルパルパルパルパル……

地底の橋

地底の往来はいつもひっきりなしに、脇目も振らずに歩いてく。橋に佇む人物など視界にも入れず、いや、むしろ意図的に無視して歩いてく。あれは魔性の目だ。緑のばけものだ。目が合ったら、御仕舞い。

地底の橋には姫がいる。

燃えるような赤でなく、澄んだ青でなく、どろりとした深淵の緑。橋姫の眼光はぎらりと鋭く、どんなカットを施した宝石よりも輝いてものを見つめていた。彼女の目にはほとんどのものが妬ましく見えた。

今日も今日とて橋に立ち、道行く人々を眺めるだけの簡単なお仕事。橋から遠く離れることは叶わず地上へと繋がる穴を羨望のまなざしで見つめるだけ。ああ、私だって地上に行ってみたい。人に紛れて、人並みに楽しんでみたい。危害を加えるわけでもないのに忌み嫌われるこの眼がうらめしい。普通が妬ましい。他人が妬ましい。世の中全てが妬ましい。

「あなたは毎日ここで　なにをしているの？」
「橋の番人として意味もなく突っ立ってるだけよ、ああ妬ましい妬ましい」
「大変ね」
「そうね。あなたは誰？」
「ねぇ、おはなし、してもいい？」

黒い帽子をかぶり、スカートをふんわり膨らませた少女がひょっ

こり現れ、にこり尋ねた。

「……ヒマだし、どうぞ？」

「わたしね、お家は大きなお屋敷なの」

「恵まれてるのね、妬ましい。お名前は？」

「う～ん……ないしょ。お家はね、ペットがね、たくさんいるの」

「素敵な家じゃないの。妬ましいわ」

互いに目を合わせず、往来を見つめて話す。会話は要領を得ず脱線しつつも一応、成立していた。橋姫は子どもに付き合ってあげる感覚で適当に聞き流し、適度なタイミングで相槌を打つ。もちろん「妬ましい」というのを忘れずに。少女との会話は思いのほか長引き、気付けばあたりは夕暮れだった。

「ほら、お家に帰らなくていいの？　さっき言ってたお姉さんが心配するんじゃない？」

「わたし帰っても気づかないもん」

「？」

「ねぇまた来てもいい？」

「許可なんて取らなくても私は毎日ここにいるわよ」

「じゃあまた来るね」

そこで初めて橋姫は少女と目を合わせた。自分と同じ緑の目とかち合う。

「わたしとあなた、お揃いなのね」

にこり微笑む少女の顔をまじまじと見つめて立ち尽くす。ハッと気付くと少女はもういなかった。

宣言通り、少女は翌日もやってきた。橋姫は立ち、少女はしゃがんで互いに目を合わせることなく、そして往来を見るでもなしに見つめて会話する。たまに少女が家のことを話すくらいであんまり互いの素性は語らず、当たり障りのない天気の話や食べ物の話をしていた。

「昨日、どうしてここへ来たのかしら」
「わかんない。気付いたらいたの」
「そう、それは困ったわね」
「こまったね」

また夕暮れがやってきて、橋姫は少女に帰宅を促す。

「さぁ帰りなさい。子どもは帰る時間よ」
「え～もうちょっといたいなぁ」
「駄々捏ねる子どもは帰らないとね。さぁ、とっととお帰りなさい」

少女は橋姫の裾を掴んで抗議したが聞き入れられることはなかった。仕方なくふわり浮かんでひらひら手を振ってどこかへと飛んでいった。その際に体に巻きつくコードのようなものと青い目玉に初めて気が付いたが、あまり友好関係が広くない橋姫はそれが何か分からなかった。

「あの子は私の眼を見ても何も言わないのね……妬ましいわ」

あくる日も、そのまた次の日も少女はやってきた。おしゃべりをして帰る。その繰り返し。たまーに少女が家から持ってきたというお菓子を食べるくらいで、これといって楽しいことをしていたわけ

ではなかった。なのに帰るのをいつも渋った。

地底にもわずかな季節の変化はある。橋姫と少女のおしゃべりはついに季節を一巡した。

「いつも思うのだけれど。あなた、お家、帰りたくないの？」
「そうかもしれない」
「……家くる？」
「いいの！？」

ほんの気の迷いで少女を招くことにした。夕飯を食べさせてそこそこの時間に帰せばよいだろう。っていうか、なんで私はこんなに保護者じみたことしてるのかしら。

少女は飛び跳ねるように橋姫のあとに付き従い、橋姫はいつも一人の帰路と違う感覚に慣れず落ち着かない。やけに少女がひっついてくるから、頭を一度ぽりぽり掻いて、いい加減に聞こうと思い、質問してみた。

「あなた、お名前は？」
「……こいしっていうの」
「そう。私はパルスィよ、よろしくね」
「手ぇつないでもいい？」
「べ、別にいいけ、ど……？」

繋がれた少女の手は小さく、柔らかく、妙にどぎまぎとする。何らしくないことを考えているんだ！　と己を叱咤し歩みを進めた。橋姫の家は橋からほど近く、粗末でも豪華でも何でもない普通のつくりだった。普通に生活臭があふれていて、普通に暮らしが想像で

きるような家。

「パルスィの家って普通なのね」

「こいしの家はお屋敷だから庶民の暮らしは分からないでしょうけど」

「普通って素敵じゃない」

何気ないこのひとことが、橋姫にはいたく嬉しかったのを少女は理解できないだろう。普通であることの嬉しさ。ばけもの呼ばわりされてきた橋姫が妬み、憧れた『普通』。どうやらこいしには私が普通に見えるらしい。嬉しかった。

「ご飯は何がいい？」

「ハンバーグ！　あとスパゲッティとケチャップライスもあったら満点よ！」

「少しモ遠慮しないのね。　えーと、材料あったかしら……」

「お姉ちゃんのハンバーグおいしいんだよ、噛むとじゅわって肉汁が出てきてね、」

「こいしって家帰るのは嫌いなのに、お姉さんのことは好きなのね」

「お姉ちゃんの大好きだもん！」

じくりと何か感じたのを、橋姫は無視することにした。嗚呼、妬ましい。

「……どうして要望通りのものが作れてしまうだけの材料があるのかしら。妬ましいわ」

「おお、やるね、パルスィ！」

「じゃあ満点もらえるように頑張って作りますか」

「楽しみにしてるね！」

「適当に座ってていいから」

たまねぎは飴色になるまで炒めて水分を飛ばす。固くなってしまうので、捏ねる回数はほどほどに。フライパンで表面だけ焼いたら、あとは水を入れて蒸し焼きで煮込む。その水をトマトソースで代用すれば、ついでにスパゲッティも同時にできる。煮込む間にもうひとつフライパンを用意してケチャップライスを作れば効率よく作業は進む。

橋姫は一人暮らしで身に付いたスキルを如何なく発揮して手早く作っていく。せっかくだからコーンスープとサラダも作るか、と燃えてきてしまってさぁ大変。食卓には見事なディナーが並ぶこととなった。

「こいしー出来たわよー？」

「……」

「こいし？」

返事はない。怪訝に思い、居間で待っている少女を覗き込んでみる。

「寝てる……」

天使の寝顔だった。無防備なそのほっぺたをぷにぷに、つっつんしてみる。反応はない。顔を近付け、ぐいぐい距離を縮める。あと少しでくっついてしまう、という所で我に返った橋姫は動きを止めた。何やってるの自分、ああ、でもこいしが可愛すぎて妬ましいからね。仕方ないわ。その時少女は目覚め、はたと目が合う。

「ん～～にゃむにゃむ。わたし寝ちゃってた？」

「ええ、そうよ。ほら夕飯出来たんだからあったかいうちに食べるましょ」

「んー……。やっぱりパルスィの目ってきれいだね。いつまでも見てたくなっちゃうや」

しばし沈黙があった。固まる橋姫と、微笑む少女。

「褒めてもデザートにゼリー追加くらいしか無いわよ？」

「え、ゼリー好き好き！！」

夕飯を食べ終えた。デザートのゼリーも食べた。少女の食べ方が思った以上に綺麗だったので驚いてしまったほどだ。さて、どうやってこの家出少女を帰したものか。

「ねぇ泊まってったらだめ？」

「駄目。お姉さんが心配するでしょ」

「えーだってー！」

「えーも、だっても無いわよ」

「むぅー！」

「むくれても駄目なモンはだぁめ！」

「逆に考えて。こんな時間に帰ったらあぶないよ？」

それは考えてなかったわとうなだれる橋姫をよそに少女ははしゃぐ。着替えをどうするかとか、家へどうやって連絡するかとか。考えることはたくさんあったが眠そうな少女を見てまずするべきことが決まった。お風呂に入ってもらわなければ。

「よぉし、じゃあ仕方なく泊まるのを許可するわ。だからお風呂入ってきなさい。あっちだから」

「パルスィも一緒に入ろうよ」

「絶対に、い・や！」
「えーー。ん～じゃあ後で一緒に寝てよ」
「ちゃんとお風呂入ってくるならいいわよ」
「きゃー！」

もぎゅ。

「ねぇこいし、ひっつきすぎよ」
「だって布団ちっさいんだもの」
「悪かったわねぇ……」

風呂上りの少女はたいそう可愛らしく、橋姫はまた妙な感覚になってしまった。銀色っぽい髪は自分の髪にはない美しさがあったし、同じシャンプーを使ったはずなのに、すごくいい匂いがしていた。

「こいし。聞きたいことあるんだけど、いいかしら？」
「うん。どうぞー」
「あなたの名字、もしかしなくとも『古明地』だったりするの？」
「……なんだ、知ってたんだ」
「あなたがお風呂に入ってるときにずっと考えてたのよ。地底の管理者とその妹くらい、さすがの私でも知ってるわ」

少女はコードをたぐりよせ、青い目玉を指さした。橋姫は何も言わずにそれを見つめる。合わせて４つの緑目が青い目玉を見つめた。

「わたしね、覚なの。まぁ心は読めないんだけどね。パルスィは何にも聞いてこなかったから助かったなあ」
「そう。私は橋姫なの。あなた嫉妬は怖くない？」

「心読めちゃうのに比べたらてんで可愛いモンだと思うよ？」
「心読めない覚なんて怖くもなんともないわよ？」

少女は橋姫のおでこに自らのおでこをくっつける。

「みんな心ではどんなことを思ってるか分からないの。でもってそれを隠して生きていくから嘘と建前ばかりの世の中なのよ。でも、あなたは包み隠さずに言ってくれるからラクちんよ。だってね。どこが悪いか、とか言ってくれないと直しようがないのに、勝手に嫌っていったりするの。もう疲れちゃった」
「私、妬ましいばっかりぶつぶつ言ってると思うけど？」
「えーだって、不必要に傷つけることは何一つ言ってないでしょう？」
「そう、かしら……」
「うん。それにこうやって私が『古明地こいし』って知っても変わらず接してくれるし。ふへへ」
「別に、あなたが誰でも、何でも、あなたはあなたでしょうが」
「パルスィは優しいね。う～ん……なんかね、わたし、あなたのこと好きになっちゃったかもしれないの」

どうしてこの少女はこうも自分の欲しい言葉をくれるのか。妬ましい、妬ましい。布団が小さいのは事実。せっかくだからもう少し近づいておこうか。

「そう。じゃあ……。また明日来れば？」
「いいの！？」
「お姉さんにちゃんと断り入れること。いいかしら？」
「うん！」
「よしよし。いいこね」

少女こいしは、橋姫パルスィに渾身の抱擁をした。むぎゅうとしがみついて頭をぐりぐりこすりつける。それは二人の金銀の髪が交差して見事な情景だった。

地底の往来はいつもひっきりなしに、脇目も振らずに歩いてく。橋に佇む人物など視界にも入れない。

だけれど極まれに、緑目が４つあることに気が付く人がいたりするのである。

そう、地底の橋には姫と少女がいる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8030y/

東方稲子神

2011年12月8日02時55分発行